

豆狸の寝言

副会長 三原幸二

会社へ向かう途中、四つ角に差しかけたところで、左側の道から来た青年と交差するようなかたちになった。

すると、青年は立ち止まって、ものは言わないが私へ先へ行って下さいというようなしぐさをした。

青年の方が私より早く四つ角に達していたし、歩くスピードも青年の方が早いので先に行ってくれるように手で示すと、青年は軽く会釈をして私の前を通り過ぎて行った。

ただ、これだけの事である。ただこれだけの事で、私は感激したのである。

数日前には、交差点の横断歩道を歩いている私の目の前を、斜め後ろから来た女性がぶつかりそうになりながら横切っていった。

私は思わず「人の前を横切るな!」と声を出したが、女性は平然として、振り向きもせず、当然あやまりもせずスタスタと歩いて行った。

こんな事を、歩道を歩くたびに味わわれるのである。信号が赤でも平気で渡って行く。こういう人たちを、運悪く車に乗っていてはねてしまった人は大変気の毒である。しかも、こういう人たちは根が傍若無人だから、被害者になった場合、ここぞとばかりにその損害を強弁するそうである。

嫌な世の中になったものだ。それだけに道を譲ってくれる青年にいたく感激するのである。それだけに。

(何でもなし話) 2008年執筆

